

## 第6回 軽井沢フューチャーズレポート



レセプションで挨拶される佐藤町長

「6月の軽井沢は心地よい、若緑の美しい最高の季節です。明治時代にお蚕のかごをネットにして、テニスが始まったこの軽井沢会のコートから、どうか世界に羽ばたいて頂きたい」来賓の佐藤雅義軽井沢町長は、そう選手たちを激励した。軽井沢フューチャーズ恒例のレセプションパーティだが、今年は会場が変わった。コートから直近の(財)軽井沢会集會堂である。



(財)軽井沢会集會堂

大正11年に建設され、その後改築されたが同会の歴史を見守ってきた施設、屋根は入母屋作り、ポーリス建築の歴史を感じさせる建物である。そして運営体制も現実に即し横澤規佐良会長以下、コートに日参するスタッフに一新された。「継続は力なり」がこれからの軽井沢フューチャーズにとってテーマになっていくことだろう。

予選が終了しメインドローも発表された日曜の夕刻、選手そしてサポーターが続々と集會堂に集まってきた。「へえ、こんな建物だったんですね」格調高い内装に驚きの声も… 例年通り田口忠一委員の司会でパーティは進行していく。開口一番、横澤規佐良大会会長の挨拶では、日本男子を世界に送り出そうと、故宮城黎子さんが立ち上げたグランドスラムテニス基金の発展形として、この大会があること。企業、大学などのスポンサーに頼らず、テニスを愛する個人によって支えられるフューチャーズであることが強調された。伍堂英雄東京都テニス協会会長の発声にて

乾杯、「継続は力なり」をテーマとする大会の幕は開いた。食事はレストラン・ポボスよりのケータリング中心で、質量ともに申し分なく好評。選手たちも遠慮なく栄養補給できていた様子でした。今年は本戦出場選手は全員参加、にぎやかでもあり喜ばしいこと。ジャケット着用のドレスコードは、かなりの選手に遵守されていて、次回は全選手に徹底されると信じたい。

パーティの後半では、八田修孝日本テニス協会広報委員長による選手紹介。



若手有望選手を紹介する八田JTA広報委員長

選手全員がステージに立ち挨拶、少ない持ち時間の中で自分をアピールすることも選手にとっては大切なトレーニング。



壇上で挨拶する本戦出場選手達

ユニークな挨拶の金メダルは松永浩気「始めまして、岩淵聡、あ岩見亮です」とやったのには場内大爆笑。アメリカ人のダブルスパートナーSYKUT選手の英語を佐藤文平が名(迷)通訳、これが銀メダル。妹・美咲の名前から入った(宮里藍のお兄ちゃんみたいでした)土居諒太が銅メダルという評価でいかがでしょう。でも皆短時間で自分を表現していました。

中締めでステージに立った諸戸清郎大会副会長は「来年もよろしく、ではなく来年はここにいないという決意で大会に臨んでいただきたい」と選手たちを激励、多くの参加者はウィダーインゼリー、虎屋の羊羹、エノテカのワインなど定番のプレゼントを手に宿へと戻って

いった。なお旧軽井沢ゴルフクラブで行われた懇親ゴルフコンペは20名参加、元デ杯選手の河盛純造さんが2年連続の優勝でした。

翌7日から本戦に突入、今年は前週にグアムでフューチャーズが開催されたため、これに参加した選手はかなりの強行軍。炎天下の試合で消耗は、いかに若い選手とはいえダメージは少なからずあったのではないだろうか? グアム遠征組の選手は誰一人、二回戦を突破できなかった。シングルス8強に残った選手の国籍は韓国5、日本2、豪州1。数字で見る限り韓国勢の活躍が目立った。「練習コートをいつも最後まで使っているのは韓国勢でしたね、せっかく日本の若手選手の登竜門として開催しているのにちょっと残念」ほかに「家に食事に来てくれるのはいいんだけど、翌日会場で会っても挨拶できない選手もいました」など、一部日本人選手への苦言があったことも付記しておきたい。練習量ではほめられた韓国勢もプレイヤーラウンジでの「マナーが悪い」などの指摘がありました。選手の自覚を促すのも、サポーターの仕事かもしれませんね。



開口選手

そんな中、いかにもフューチャーズらしい対戦があったのは準々決勝。19歳の守



守屋選手

屋宏紀と18歳の関口周一の対決、過去の戦績は守屋の5勝だが、1年半以上前ジュニア時代の戦績とあってはあてにならない。マッチ練習では関口が勝つこともあり、平日の午後とあって観客は30名ほどだったが筆者にとっては注目の勝負であった。関口はこの春からツアーに参加し早くも600位台にランキングをアップさせている。筑波大学フューチャーズでは決

勝まで進出!

今一番勢いのある選手だ。守屋については言うまでもない。昨年輕井沢で語っていた「来年は300位台に入りたい」という目標にはちょっと届かず400位台にいるが、全日本で4強入りするなど順調に成長してきている。

この二人、何もかもが好対照なのだ。例えば試合前のジョギング、10番コートを手たてに使う人目につかぬようアップするのは守屋。誰もいない6~10番コートで大きく手を振りながらアップするのが関口。5回以上、時には2桁の回数、入念にボール突きを繰り返してからサービスする守屋と2、3回でパーンと打ってくる関口。慎重にゆっくりしゃべる守屋と元気のいい関口。試合中のボール拾いも小走りに行くのが関口なら、ゆっくりと歩いて守屋はボールを拾ってくる。静と動、くっきりタイプの分かれる二人は会場で気の合う練習相手でもあるが、この日は別。

もちろん先にコートに入ったのは関口、手にはバナナが2本、長期戦も辞さずの構えだ。少し遅れて守屋がコートに入る。しかし、この日の試合、ストローク戦の主導権はほとんど守屋にあった。なにより配球のコースを読ませない技術精度が高い。角度のついたリターンが関口のコートを切り裂く。ドロップショットのタッチも心憎いほどだ。関口はサービスキープできたのが2ゲームだけで、全く本領を発揮できず、注目のプロ初対決は1時間15分で終わった。二人の戦いを見守った、守屋の指導者でもある谷沢英彦コーチは「お互い、手の内を知り尽くしているから、カタかったし、相手の嫌がることをしようと思って、長所の殺し合いになってしまいましたね。試合としては凡戦だったかもしれませんが、これからも切磋琢磨してほしい」と暖かい眼差しで見守っていた。この先二人の勝負は何度もあることだろうし、きっと名勝負も生まれてくるに違いない。

負けても関口の視線は先を捉えて

いる「積極的にポイントを取れるパターンを多くして、2012年のグランドスラム予選にかかるのが目標です。2・3年の間に全日本も取りたい。サービスの強化が急務です。クレーでは大型の外人選手に苦しいけれど、ハードなら十分戦えるはず」テニスにも身長によるクラス分けがあって「170センチ級」があったなら、関口も守屋も今すぐトップ10入り? たらればの話ではあるが、そう思いませんか?

プレーヤーズラウンジで、守屋の話を聞いた。

「輕井沢のコートサーフェスでは、ラリーが長くなるので、いろいろなショットを使うようにしています。スライスなどを効果的に入れることで、自分の持ち味であるフラット系の球を生かしたい。プロで1年やってみて、勢いだけではやっていけないこともわかったので、一つ一つのプレーの精度を上げることが今の課題です。チャレンジャーのレベルにいくと、流れの中で大事なポイントをきっちり取り切らないと通用しません。技術的に一番の課題は、やっぱりサービスの強化です。ファーストサーブの確率を上げること、球種、コースを細かく打ち分けられるように…」

錦織圭は守屋より学年で一つ上。ジュニア時代の対戦は?と尋ねると

「やったことないんです。自分が強くなかったのが当たれるところまでいけなかった。対戦してみたいですね。今のところは【自分もいけるぞ】って思わせてくれる存在です」ゆっくりと、言葉を選ぶように語る。如才なさがじわじわと伝わってくる、彼が新入社員だったら、さぞかし上司受けがいいだろう。可愛いから女子社員にも人気者になるだろうが。関口戦のあと、準決勝では韓国のKIMと対決、竹内研人によく似たサ



仁木・喜多組のiフォーメーション

ウスボーだったが、取らなければいけないポイントをしっかり取る、ゲームプランニングで勝利。不振の日本勢の中にあって一人気を吐いた。

ダブルスでは、第一シードの岩見亮・近藤大生ペアが、近藤の肩痛で棄権。本命不在のドロートとなった。上の山では連日のスーパータイブレークを制して仁木拓人・喜多文明ペアが決勝進出、仁木サービスのときはiフォーメーションを使って、仁木のストローク力を生かし、喜多サービスではオーソドックスにネットを取る作戦が功を奏していた。下の山から圧倒的な強さで上がってきたKWON・LEEペアと対決!



KWON・LEE組のプレー

結果は韓国ペアの順当な勝利。仁木「ファーストはボクがよければ取れたんですが… 低くて深い球に苦しめられました」喜多「(KWON)オーヒーさんの手のひらの上で遊ばされたカンジでした」ダブルスはキャリアがものをいう。それでも仁木・喜多はダブルスで初の準優勝、3月からペアを組み始めて最高の成績だ。喜多にとっては金曜夜草津へ移動、土曜朝一番での予選を午前中に戦い勝利、トンボ帰りのファイナルだった。勝ち残って忙しいのは選手にとっては嬉しい悲鳴に違いない。

シングルス決勝、守屋の相手はメルボルンからやってきた刺客、Verryth Mark。196cmの長身、強烈なサービスを軸にゲームを組



196cmの長身から強烈なサービスを打ち込むVerryth選手

み立ててくる19歳。守屋とはジュニア時代にも戦っていて、守屋の2戦2勝、とはいえ、当たりまくるファーストサービスを武器に、岩見を韓国勢を下してきたMarkには勢いがある。フューチャーズにふさわしい若者同士の対決となった。好天に恵まれた今大会、コートが硬くなりがちで試合前には散水してコンディ



ションを整えていた。決勝当日も試合途中両者からのリクエストで散水が行われた。そんな乾いたコートに制したのはMarkのパワー、「リターンをしっかりして、長いポイントにもちこみたい」と試合に臨んだ守屋だったが、この試合では残念ながら、196cmの豪打に屈する結果となった。6-4、6-1。優勝ポイント18は豪州の若手選手が手に入れ

た。この二人の対決、翌週の草津では2回戦で実現。守屋が6-4、6-4で雪辱。フューチャーズ戦士たちの戦いは綿々と続いていく。

今年は、ITF派遣のスーパーバイザーがいつものギャリーさんではなく、セルビア人のウラジミール・アークさんであった。「セルビアは日本より小さい国だ



マナーキッズプロジェクトの開催風景

けれど、テニスの名選手をたくさん生んでいます」と自国の誇りを胸に世界中をわたり歩いている。「細かい指示もあったけれど、フレンドリーな人でした。評価も例年以上のものをいただけました」とは太田和彦ディレクター。週末には、長野県内のジュニアを対象に石

井弥起、島中将人選手がレッスン、本格的な強化練習に少年少女たちの瞳は輝いていた。地元との密接な関係も軽井沢フューチャーズの特徴で、本年はマナーキッズプロジェクトとも連携し、例年以上に充実したコーチングが展開された。6年目にして初の雨なし進行、こんな順調に試合が消化できたのは、軽井沢フューチャーズ発足以来初めてのこと。大会終了を見届けたかのように、翌日、関東甲信越地方に梅雨入り宣言が出されたのだった。

(文 小島宣明)



優勝したVerryth選手を囲んでスタッフ一同